

たまのよこやま

特集

全埋協関東ブロック連携事業報告

関東考古学フェア

平成30年度企画展示

益々好評開催中!!

関東考古学フェア 2018

関東考古学フェアは、全国埋蔵文化財法人連絡協議会関東ブロック協議会加盟法人（11 団体）が連携して広域にわたり広報・普及事業を実施し、関東地方の考古・歴史的文化財の活用及び周知を図ることを目的として行われています。今年で8年目になりますが、今年度の事業は、遺跡発表会、「発掘された日本列島 2018」展における展示解説、スタンプリリーの三事業です。

遺跡発表会「発掘された関東の遺跡 2018」

7月14日に全日警ホール（市川市八幡会館）で開催されました。本発表会は、関東の遺跡の最新情報を広く一般に発信すると共に、「発掘された日本列島 2018」展に展示されている関東の遺跡を中心に発表遺跡を選択し、展示遺跡をより身近に感じてもらうために行っています。

発表遺跡は、千葉県千葉市加曽利貝塚、群馬県藤岡市神田・三本木古墳群、群馬県渋川市金井東裏遺跡、東京都国分寺市武蔵国分寺跡附東山道武蔵路跡の4遺跡で、特別講演として、「発掘された日本列島 2018」展についてがありました。以下、発表順にその概略を紹介します。

加曽利貝塚は、縄文時代の大貝塚ですが、昨年全国で62番目の特別史跡に指定されています。縄文時代の遺跡としては4番目で、貝塚としては初になります。千葉市埋蔵文化財調査センターの西野雅人氏による発表では、加曽利貝塚が明治・大正時代の頃には縄文土器の編年学的研究等を通して、日本考古学発展の舞台となり、昭和30年代から50年代にかけては、貝塚の保存について市民主体の保存運動があり、このような運動の先駆けとなると共にその後の埋蔵文化財保護に大きな影響を及ぼしたことなどが紹介されました。これまでの調査面積は、全体の約7%に過ぎないとのことですので、次世代に引き継がれていく極めて貴重かつ重要な貝塚と言えるでしょう。

神田・三本木古墳群は、藤岡市教育委員会文挾健太郎氏より発表がありました。この古墳群では、204基の古墳が確認されており、今回の発掘調査ではその内の14基について調査しています。注目されるのは、南端で発見された6基の古墳です。

いずれも、横穴式石室を持つ直径約10mの円墳で築造年代は6世紀後半になります。6基中4基の墳丘は、土ではなく川原石で構築されており、神田・三本木古墳群では初めての発見であり、これらの古墳は、埴輪の遺存状況も極めて良好であったことが報告されました。

午前中最後の発表は、文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門藤井幸司調査官による特別講演です。「発掘された日本列島 2018」展は、全国17遺跡の速報展示と特集展示「装飾古墳を発掘する！」で構成されており、これらについての解説がありました。装飾古墳については、その劣化防止及び活用に関わる取り組み事例として、福岡県桂川町の特別史跡王塚古墳などの紹介、大規模災害からの保護の取り組みとして、福島県双葉町の史跡清戸迫横穴や熊本県嘉島町の史跡井寺古墳などの事例が紹介されました。

午後最初の発表は、金井東裏遺跡です。群馬県埋蔵文化財調査事業団の杉山秀宏氏より、1500年前の榛名山大噴火により発生した火砕流でパックされた古墳時代のムラについての報告がありました。被災した4人の人物、土器900以上・玉類80・ガラス玉200・鉄器180・石製模造品150・臼玉1万点が出土した3号祭祀遺構、火山灰降下後に残された人の足跡や馬の蹄跡など、遺跡が持つ情報量が豊富で圧倒されます。特に注目されるよろいを着たまま発見された古墳時代人については、頭蓋骨の形質学的分析やストロンチウム同位体分析から40代の男性であることその他、北九州・近畿地方の



遺跡発表会の様子

古墳時代人に近い渡来系の人物で、西からやってきた人物であることなどが分かってきているようです。被災直前のムラの様子が、そのまま遺跡に残された稀有な事例であり、参加者のアンケートにも「もっと詳しく聞きたかった」との声が数多くありました。

最後の発表は、国分寺市教育委員会の野中太久磨氏による武蔵国分寺跡附東山道武蔵路跡です。遺跡は、今までに800箇所以上で発掘調査が行われ、その詳細が継続的に解明されてきています。今回の発表は、史跡整備に伴う事前確認調査の成果報告が中心で、新たに発見された塔跡についての報告がありました。新発見の塔跡は従前より知られていた塔跡の西方約50mの地点で見つかり、時期の異なる二つの七重の塔が武蔵国分寺には存在していたようです。

当日は、250名の方が会場に足を運んで下さり、各遺跡の発表及び特別講演について、熱心に耳を傾けていらっしゃいました。また、会場からは多くの質問もあり、遺跡に対する関心の高さを感じることができました。

展示解説

「発掘された日本列島 2018」展における展示解

説は、今年度から始めた事業です。江戸東京博物館での会期中、平日の火曜日と木曜日の10時30分からと14時30分から40分間ほどの展示解説を行いました。展示をより分かりやすく解説し、展示遺跡に対する理解を一層深めてもらうことが大きな目的です。展示解説員と見学者が身近で接する形で解説を行いますので、解説が終わった後も熱心に質問されている方が多くいらっしゃいました。

スタンプラリー

関東ブロック協議会加盟法人の他、31館の協力館が対象施設となり、6月2日から11月30日にかけて実施しています。三都県以上のスタンプを集めれば抽選でオリジナル考古グッズが当たりますので、この機会に関東各都県の埋蔵文化財センターや博物館・資料館などを巡りながら歴史を身近に感じてみてはいかがでしょうか。「見て・歩いて・体感して」スタンプラリーや展示・各種のイベントを楽しみながら、考古学にふれてみましょう！

スタンプシートは、全国埋蔵文化財法人連絡協議会サイト (<http://www.zenmaibun.com/>) からダウンロードできますので、是非、ご利用ください。
(西澤 明)

スタンプラリーマップ

全国埋蔵文化財法人連絡協議会
関東ブロック協議会加盟法人(11団体)

(公財)茨城県教育財団 TEL029-225-6587	(23) (公財)印旛都市文化財センター TEL043-484-0126
(1) (公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社埋蔵文化財調査センター TEL029-276-8311	(公財)千葉県教育振興財団文化財センター TEL043-424-4850
(2) (公財)鹿嶋市文化スポーツ振興事業団鹿嶋市どきどきセンター TEL0299-84-0778	(33) (公財)東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター TEL042-374-8044
(5) (公財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター TEL0285-44-8441	(公財)かながわ考古学財団 TEL045-252-8689
(10) (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 TEL0279-52-2513	(公財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター TEL045-890-1155
(16) (公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 TEL0493-39-3955	

34 江戸東京博物館
※列島展会期中のみ(6/2~7/22)

35 日野市郷土資料館
TEL042-592-0981

36 横浜市三股台考古館
TEL045-761-4571

37 横浜市歴史博物館
TEL045-912-7777

38 川崎市市民ミュージアム
TEL044-754-4500(代表)

39 千葉県立中央博物館
TEL043-265-3111

40 成田市下総歴史民俗資料館
TEL0476-96-0080

41 成田市三里塚御料牧場記念館
TEL0476-35-0442

42 八街市郷土資料館
TEL043-443-1726

43 印西市立印旛歴史民俗資料館
TEL0476-99-0002

44 白井市郷土資料館
TEL047-492-1124

45 茨城県埋蔵文化財センター
TEL029-289-2002

46 茨城県立歴史館
TEL029-225-4425

47 大田原市なす風土記の丘湯上資料館
TEL0287-98-3322

48 那珂川町なす風土記の丘資料館
TEL0287-96-3366

49 しもつけ風土記の丘資料館
TEL0285-44-5049

50 下野薬師寺歴史館
TEL0285-47-3121

51 岩宿博物館
TEL0277-76-1703

52 茨城県歴史資料館
TEL0279-56-8967

53 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

54 茨城県立歴史館
TEL0279-52-4094

55 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

56 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

57 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

58 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

59 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

60 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

61 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

62 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

63 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

64 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

65 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

66 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

67 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

68 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

69 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

70 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

71 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

72 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

73 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

74 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

75 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

76 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

77 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

78 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

79 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

80 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

81 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

82 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

83 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

84 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

85 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

86 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

87 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

88 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

89 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

90 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

91 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

92 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

93 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

94 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

95 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

96 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

97 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

98 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

99 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

100 茨城県立歴史館
TEL0279-52-2102

平成30年度 関東考古学フェア スタンプラリーマップ

夏休み期間中の7～8月にかけて、当センターの行事に加え、自治体などとの連携事業を実施しました。ここでは、文京区・飛鳥山博物館・多摩動物公園との行事を紹介します。

◆7月31日 「子ども考古学教室」

於 文京区シビックセンター アカデミー文京

夏休みが始まって間もないこの日、文京区教育委員会との連携事業が開催されました。このイベントは毎年とても人気が高く、定員を大幅に上回る応募があります。今年も例にもれず、午前、午後各20名の定員に対し90名前後の応募があったそうです。

まずは、「考古学」について知るところから始まり、身近な埋蔵文化財（＝遺跡）についても学んでいきます。当日の資料として、文京区の遺跡一覧表と遺跡地図が配られました。遺跡地図を見ながら、自分が知っている場所が遺跡かどうか、そんなことを調べる時間もありました。

これらの話が一通り終わると、次は黒曜石で紙など



を切ったり、縄文土器と弥生土器を比べたり、勾玉作りなどの体験です。天然のガラス

とも言われる黒曜石の割れ口は、非常に鋭利です。切れ味を試すために用意したのは、新聞紙とナス。どちらもサクサクと切ることができました。土器の比較では、区内の遺跡から発見された土器を手に取り、文様や形などをじっくりと観察しました。

最後は、お待ちかねの勾玉作りです。四角い滑石



を紙やすりで削り、勾玉の形に近づけていきます。中には削り過ぎて、とても小さな勾玉

になってしまった小学生もいましたが、オリジナルの勾玉を完成させることができました。

◆8月8日 「夏休み縄文人なりきり体験教室」

於 北区飛鳥山博物館

北区飛鳥山博物館との連携事業を予定していた当日、関東地方に接近していた台風の影響により、朝から大雨が降り、風も強まっている状況でした。イベントの中止が懸念されましたが、実施場所を変更するなどして開催することになりました。こちらのイベントも大変な人気で、午前、午後いずれの回も抽選だったそうです。

このイベントは、縄文人になりきって縄文時代の暮らしを学び、体験しようという企画です。縄文人に「なりきる」ためには衣装から!?という訳で、アサ製の縄文服を着るところから始まります。縄文服を着た小学生たちは、同館の学芸員の解説を聞きながら、縄文時代の環境や暮らしぶりについて学んでいきます。



縄文土器の説明を真剣に聞く小学生たち

その後は、いよいよ体験のスタートです。各グループに分かれ、「弓矢・クルミ割り」「土器の模様付け」「火おこし」を順番に体験していきます。クルミ割りではオニグルミの殻の堅さゆえに割るのに苦戦したり、火おこしでは立ち上る煙に思わず顔を背けたりする小学生も見られました。苦戦しつつもすべての体験を終えた参加者には、「夏休み縄文人なりきり体験教室」の認定証が授与されました。



「オニグルミ、なかなか割れないよ！」(左)
「あっ、火がついた！！」(右)

体験の中で一番人気はやはり「火おこし」で、終了後のアンケートを見てもこれを目当てに応募したという意見が多くありました。

◆8月18日「親子で学ぼう！人間と動物のつながりー縄文人のくらしを探るー」

於 都立埋蔵文化財調査センター・多摩動物公園

夏休みも後半に差しかったこの日、多摩動物公園との連携事業を実施しました。平成26年度から始まった同園との連携は、早いもので今年で5年目を迎えます。このイベントの趣旨は、縄文時代における人間と動物との関わり合いを考古学と動物学の2つの視点から学ぶことです。当日のプログラムは、当センターでの見学と多摩動物公園での見学という二部構成です。「縄文人と動物のつながり」と言っても、その切り口は多様なので、私たちが普段何気なくしている「食べる」という点に着目して、全体のプログラムを構成しました。

センターでのプログラムは、食品サンプルの中から好きな食べ物を選ぶことから始まります。これらの食品サンプルは縄文人が主に食べていたものばかりで、それらはいつ、どこで、どのようにして手に入るのか、また、入手するにはどのような道具



縄文人の食卓は旬の食べ物ばかり！
「どれにしようかな〜？」

を使うのか、そんなことを考えてもらうために用意したアイテムです。選んだ食べ物について参加者自身

でひとしきり考えた後、それぞれの食べ物について、解説を加えていきます。そして、「動物」に関する部分からが今日の本題です。展示ホールの模型や縄文土器を使い、縄文人の狩りの方法や、土器のモチーフになった動物など、様々な角度から縄文人と動物との関わりを見ていきます。プログラムの最後に『縄文人のくらし』という映像を見て、センターでのプログラムを締めくくりました。

多摩動物公園へ移動したら、ここから同園のスタッフへとバトンタッチ。特別ガイドツアー「縄文の森の動物たち」の始まりです。動物解説員や

飼育担当のスタッフから説明を聞きながら、イノシシ、ニホンジカ、ノウサギ、ツキノワグマを



ワークシートには「どんな足？」との質問
イノシシをよく観察すると…

見て回ります。同園でのプログラムの締めは、アオダイショウの観察です。なんとここでは、本物のアオダイショウに触れることができます！おっかなびっくり、手を伸ばす参加者たち。生きたアオダイショウの感触はどんなだったでしょうか。

約半日におよぶ長いイベントでしたが、子どもたちは最後までワークシートに一生懸命に取り組んでいました。多方面で「縄文」が話題になった今年の夏ですが、学校の教科書などではなかなか知る機会の少ない、縄文人と動物のつながりを知ってもらうことができたのなら、嬉しい限りです。(小西絵美)



本物のアオダイショウのさわり心地は？(左)
抜け殻にもちゃんと目があるよ！(右)

向ノ原遺跡は、井の頭池を水源とする神田川右岸の急峻な台地縁辺部、武蔵野台地武蔵野面に立地し、井の頭池からは約3km下流に位置しています。この遺跡は、過去2度の発掘調査が行われ、後期旧石器時代後半期(約24,000年前)と縄文時代草創期から中期(約12,000～5,000年前)にかけての遺構・遺物が数多く見つかっています。中でも縄文時代早期(約10,000年前)の竪穴住居跡や屋外炉である炉穴などが多いことが特徴です。

今回の調査は第3次調査として、遺跡の中央部から西側の範囲を調査しています(図1)。調査範囲は、近世から近代においては農地として使用され、太平洋戦争中は高射砲陣地、戦後は運動場として利用されていたため、縄文時代の堆積土は比較的良好に残されていました。調査してみると、縄文時代早期の住居跡を複数軒検出することができました。その中でも早期前葉(燃糸文期)の6号住居跡(SI06)は、長径約8mと非常に大型で、区内では2例目となる大きさの貴重な遺構です(写真1)。また、縄文時代早期に代表される遺構の炉穴も多数検出しています(写真2)。住居跡と炉穴がセットで見つかり、土器や石器なども非常に多く出土していることから、この遺跡は縄文時代早期の集落であったと思われます。

もう1つ特筆すべき成果は、調査区東側を南北に縦断し調査範囲外まで続いている、大きな溝状遺構を検出したことです(写真3)。覆土から15世紀末ごろの常滑焼の鉢の口縁部が出土したことから、この溝状遺構は中世の遺構だと考えられます。

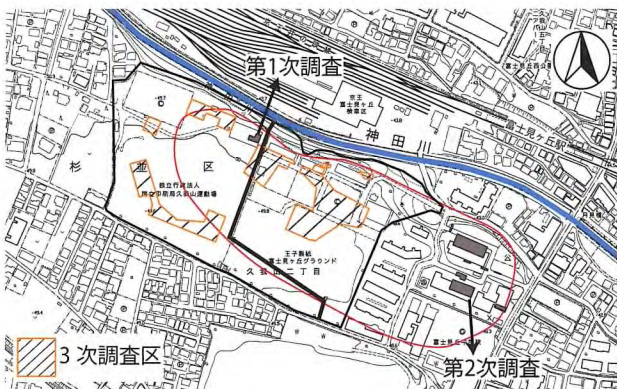


図1 調査区位置

新宿区新宿六丁目遺跡からも似た構造の溝が見つかり、区画溝と考えられます。もしかすると台地の下を流れる神田川沿いに中世の集落が営まれていたのかもしれませんが。

調査終了後は、皆様へ成果をお届けするために整理作業へと移ります。続報にご期待ください。

(堀 恭介)



写真1 縄文時代早期の大型住居跡 (SI06)



写真2 縄文時代早期の炉穴群

写真3
中世の区画溝

実に懐かしい遺跡の番号を思い出しました。まだアルバイトとして多摩ニュータウンの遺跡発掘に参加していた頃、昭和54（1979）年12月と翌年4月から6月にかけて調査した遺跡です。

その頃は「東京都埋蔵文化財センター」という組織ではなく、その前身の「多摩ニュータウン遺跡調査会」が造成工事に追われながら、あちらこちらの遺跡調査にあたっていました。いろいろな大学を卒業した先輩方が調査員として従事していましたが、アルバイトの立場ですからその補助が自分の仕事でした。でも、考古学の専攻でしたから、仕事は調査員とほぼ同じでした。

No.591という遺跡は、八王子市南大沢の山の中に立地していました。現在の南大沢からはまったく想像できない程、山また山の環境でした。下の写真中央に見える小高い尾根の先端部が遺跡の調査範囲で、奥に横たわる尾根が町田市との境、東京湾と相模湾の分水嶺、現在の尾根幹線なのです。ちなみに、調査範囲が現在のどこにあたるか



遺跡遠景（昭和54（1979）年当時の南大沢地区）

たとえば、南大沢駅の橋本寄り500～600m程の線路上になります。完全に宙に浮いています。

遺跡は少し変わっていました。縄文時代のすべての時期の土器が見つかるのですが、住居跡はなく早期の炉穴ろあなと前期の集石しゅうせき、そしてたくさんの焼礫やけれきがありました。小規模なキャンプ地的な性格の遺跡で、縄文時代には結構便利な場所だったのではないのでしょうか。

当時、周辺は造成工事と遺跡調査が斑模様まだらでしたが、まだまだ昔からの自然が残っていました。造成のための大型車両の騒音がうるさくても、それなりに自然の中に浸ることができたのです。

そんなある日の事でした。下を向いて細かな作

業をしていた時の事でした。斜面下の方から「バタッ!、バタッ!、バタッ!」と聞き慣れない音が次第に大きくなってきました。「いったい何事か」と顔をあげてみると、目の前を野ウサギが走って行くではありませんか。

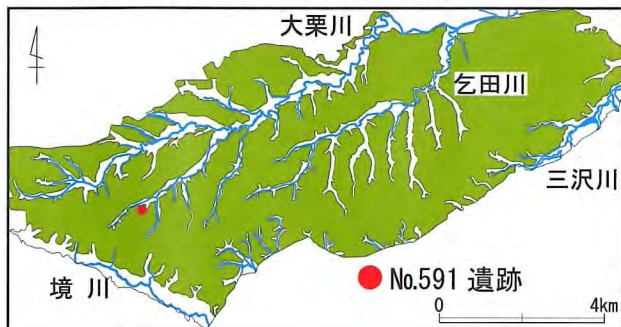
その音に気付いた作業員さんたちは、ほぼ全員が呆気あっけに取られて只々走り去る野ウサギを見送るだけでした。土が剥き出しの場所をウサギが走ると、あんな音がするのかとみんなが顔を見合わせたことを覚えています。

また、調査現場の近くに設けた事務所では、昼間の作業で実測した図面などを整理するための残業もしていました。夕方、当時は愛宕にあった本部から現場事務所に戻る途中での事。おそらく現在の南大沢警察署の裏手あたりだと思います。暗くなった道の10メートルほど先に、ヘッドライトに映し出された姿は、なんとキツネではないですか。2度目の経験でしたが、まだ残っていたのか、居てくれたのかと嬉しくなりました。その時以来、自然の姿を見かける事は二度とありませんでした。キツネたちはあれからどうなってしまったのでしょうか。そこで暮らしていた人間以外の生き物たちは、開発によって安住の地を追われてしまいました。様々な自然災害で人間たちが苦しめられている現在こそ、姿勢を正して自然と向き合うべき時なのではないのでしょうか。（並木 仁）

1/1964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

38 多摩ニュータウン No.591 遺跡



多摩ニュータウンNo.591 遺跡位置図

蒼海わたる人々

考古学から見た **とうきょう** の島々

今回の企画展示の中で、とうきょうの古代島嶼の歴史を語るコーナーのひとつとして、「火山に祈る」があります。いうまでもなく、伊豆諸島は火山列島であり、太古の昔から活発な火山活動が繰り返り広げられてきました。火山噴火は当時の人々にとっては、まさに「神の怒り」そのものであり、その都度、「鎮め」のまつりを行ったと想像されます。

展示ブースは、大島町の2カ所の遺跡から検出された土器により構成しています。大島町和泉浜C地点遺跡は、南側に三原山を仰ぐ島西部の海岸に所在し、澄んだ真水が湧くところから、この名で呼ばれています。おそらく、古代人は神聖な場として意識したに違いなく、まつりの場として最適だったのです。ここでは須恵器と呼ばれる、窯で焼成された硬質土器を地面に置き、高坏などの器に食べ物を載せて神に供えたようです。遺跡では、皿形の坏とともに、検出されました。これらの土器は、その特徴から静岡県浜名湖西岸の湖西市周辺で焼かれたもので、灰白色のきめ細かな胎土が特徴です。

一方、大島八重川遺跡では土師器とよばれる素焼きの土器が、地面に置かれ割られた状態で出土しましたが、表面が朱で赤く塗られているものが目立ちます。これも、神に捧げる器だったからでしょう。

また、まつりを執り行う役人等も伊豆国から派遣された可能性があります。和泉浜から2km南の家の上遺跡からは、身分に応じて役人が革帯に着ける銅製の銚帯金具（巡方・丸鞆・蛇尾）が見つかっています。金具の寸法から、身分が従六位の役人のもので、島を治めた人物が神に捧げたのかもしれない。



写真1 須恵器フラスコ形長頸瓶：左（和泉浜C地点遺跡）と土師器杯・高坏：上（大島八重川遺跡）

さて、古代の文献や火山研究から、西暦684年（天武13）と713年（和銅6）に大地震等に起因する



伊豆大島のマグマ噴火が起こったとされています。和泉浜C

写真2 大島町家の上遺跡出土の銚帯金具（上：巡方・蛇尾 下：丸鞆）大島町教育委員会 2004より転載。※今回は展示されていません。

地点や大島八重川遺跡の土器は、その特徴から前者の年代に比定でき、かつて式根島吹之江遺跡で発見された祭祀遺物は、後者の奈良時代初めのものでした。

いずれも天武朝～元明朝期にかけて活発化した伊豆の火山活動を鎮めるために、各島において国家的祭祀としての「鎮め」のまつりが行われたことが想像できます。こうしたまつりには、土器のほかに、貴重な短冊形の金・銀製品（幣）や鉄製武器（大刀・鉄鉞）なども使用され、それらは浜にそのまま打ち捨てられたかたちで検出されています。

近年、木曾御嶽山や草津白根山の噴火が相次ぐなか、現代に生きる私たちにとっても、地震や噴火による被害、加えて豪雨による災害を身近に感じざるを得ない状況になっています。遺跡を調査すると、そうした自然災害が起こり得る場所、例えば、河川の合流点や河口に面する微高地、活火山の麓、海辺などにまつりの痕跡を見出すことができます。それほど、当時の人たちは日常的に自然を畏れ敬い、災いを避けるためのまつりを実施して、自然に順応した生活を営んでいたのかもしれない。

今回、展示パネルに使用した三原山の噴火画像は、長年にわたり大島の文化財保護に携わってこられた岩崎薫さんからお借りしたものです。実はこの噴火の2年前、1984年に公開された平成版「ゴジラ」では、帰巣本能を利用しゴジラ（＝超巨大害獣による広域災害）を三原山に誘き出し、噴火と同時に火口に葬るという結末でした。偶然にしても、リアルなラストシーンが御神火の画像と重なって見えるのは、私だけではなさそうです。（松崎元樹）

※今号の表紙：杉並区向ノ原遺跡の調査風景。発掘調査は、とにかく地道な作業の連続なのです。

